

創立73周年

安全・安心・健康な街づくりに向けて

MaKoto

第194号

2021年4月1日発行
(年間4回発行)

一般財団法人 大阪防疫協会

東大阪市下小阪 4 丁目12-10 TEL 06 (6725) 1811
<http://osaka-bk.jimdofree.com> E-mail: obk.jimu@muse.ocn.ne.jp

Contents

防疫に関わる人文学的アプローチ～2020年度退職記念の一環として～

……大阪大学COデザインセンター「社会イノベーション部門」教授 林田 雅至
(多言語コミュニケーションデザイナー)

私の健康法 …………… 公益社団法人 日本WHO協会 理事長

甲南女子大学看護リハビリテーション学部 教授 中村 安秀



一般財団法人大阪防疫協会は、大阪府・市町村の防疫施策に協力して、感染症の予防並びに
その他公衆衛生に関する事業を行い、文化の発展に寄与することを目的としております。

防疫に関わる人文学的アプローチ ～2020年度退職記念の一環として～

大阪大学COデザインセンター「社会イノベーション部門」
教授 林田 雅至 (多言語コミュニケーションデザイナー)

序論：

防疫の基本的な意味を調べると、「感染症（伝染病）の発生・流行を予防すること。感染症患者の早期発見・隔離、消毒や媒介動物の駆除、予防接種などを行う」とある。

今、動植物（相）全体が温暖化による極端気象に苦しみ、また、プラスチック・ボトル1本のゴミ捨て行為が、自然環境下で、紫外線や衝撃などの影響を受け、マイクロチップ化され、食物連鎖で、人体に取り込まれる「悪循環（circulus vitiosus：悪徳の循環）」に陥るという「自然界のしっぺ返し」を甘んじて受け入れざるを得ない段階の苦しみであり、それは様々な種類の飲料の摂取容器製造に経済合理性、市場メカニズムの利便性から石油精製品に全的に依存した結末と言える。我々人類が、コロナ禍に抱える苦しみは、コロナそのものと戦う苦しみに加えて、こうした一連の苦しみの総体の集約であるという実感がある⁽¹⁾。

グローバリゼーションの本格期：天然痘、コレラ、ワクチン：

ところで、1520年ポルトガル人マゼランが、その海峡を通過・発見してから今年で500年目を迎え、当時はグローバリゼーションの揺籃期に当たり、その後経済マグマがスペイン、オランダを経由して最後に英国にわたって産業革命という本格期が始まる。大英帝国のインド植民地政策が展開される中、19世紀インド・コレラ（虎列刺）が欧州にもたらされ、

大流行となった。

産業革命のさ中、生まれたジェンナーは18世紀末、人体実験報告書「牛痘の原因と効果の調査」を発表し、実装化され、天然痘ワクチンが開発される。

ワクチンという言葉はラテン語vaca（雌牛）に由来するが、私が専門とするラテン系ポルトガル語も同様にvacaで、doença da vaca louca（英語：Mad Cow Disease）を、教育現場で、専門用語：牛海綿状脳症（encefalopatia espongiiforme bovina：FEB；英語：Bovine Spongiform Encephalopathy：BSE）の通称名として教える。

私事ながら、1歳足らずで腸重積を患い、当時の掛かりつけ医にからだ小さく、手術による延命が期待できず、両親に死の選択もあり得ると迫った際、両親は、死んでもよいので、執刀してくれと頼み、今日まで延命している。以来通院慣れ、病院通いが苦痛でない病弱者の人生を歩んでいる。コロナ禍、基礎疾患を抱える身として、掛かりつけ医は神経質になり、往々にして電話診療で、不要不急の外出自粛下、身近な薬局で投薬（与薬）指導を仰いでいる。

10年ほど前、遺伝から患うヘルニア大手術で、親近感を抱いてくれた看護師に失礼ながら、略語：BSの意味を問うて、Blood Sugar（ポルトガル語：açúcar no sangue）を伝えて、驚かれたことがある。医療現場で、glucose（pt. glicose）をあまり使わない。

閑話休題。天然痘は1980年根絶され、一方、コレラは19世紀を通じて世界的流行によって

人類に辛酸を舐めさせたが、19世紀末菌の特定、経口ワクチンが開発され、20世紀になって、防疫体制も強化され、地球規模の流行は抑えられている⁽²⁾。

科学的防疫 vs. 非科学的防疫：

さて、ジェンナーの種痘に対して、当時の市民はある意味、一般的で、示唆に富む反応を示した：「人間の血流の中に獣の物質を注入することは胸がむかむかするぐらい汚らしい」（生物的・動物拒否反応）、とか「正常な自然の進行に厚かましくも干渉することで、神の摂理への不信を意味する」（宗教観の揺らぎ）が社会的に顕在化する。ただ、ワクチン接種の効果が検証されて、そうした原初的・宗教的な感情は潜在化することになった⁽³⁾。

ところが、科学的・疫学（医学）的な対応に行き詰まると、今回のコロナ禍において、感情のアンバランスを保つように、否定的な感情が顕在化し、企業倒産・経営不振により、雇用確保などがままならぬ絶対的な経済的苦境に陥ると、人種間の対立、少数民族への差別的言動（ネット上のヘイトスピーチも含む）、あろうことか艱難辛苦、患者救済に命を賭して取り組む医療職への差別など、総じて「異質な他者」として、それを排除しようとする愚行・暴挙が際立つ不幸を人類は経験することになる。

我々が社会科で学んだ、身分制階級制度（アンシャン・レジーム）を超えたとされる西欧近代市民社会は理想郷、絵空事にしか思えない。日本は前近代社会の精神構造を引きずって、やはり意識の近代化は達成できていない。かと言って、地球規模で考えても、民族的自国中心主義が罷り通る現下の厳しい状況である。

非科学的防疫：人文学的アプローチ分析：

ただここでは、私自身医療職でなく、素人ワクチン論を展開したところで、何の實りも期待できず、人文学専攻研究者（辞書学〔語彙論〕、キリスト教絵画図像解釈学など）として、今年度定年を迎え、個人の業績を時系列的に整理している段階で、医学的防疫が未だ途上にある状況下、人々がどう振舞うか、古文書を渉猟する中で、ポルトガル中近世宮廷文学（戯曲）にそのルーツを求める文書解析の旅を選択することにした。

欧州で、ペスト流行時に王侯貴族が取る行動は「逃げる」ことで、中近世、要するに近代医学（疫学）確立以前では、人口の6割を超す自然免疫が獲得されるまで、疫病＝神罰（神の怒り）対策として、懺悔・告白によって神の慈悲を乞うものの、暗に物理的な逃亡



ヨハネス・ヤコービ著『黒死病養生訓』
ポルトガル語版、1495-96年（裏表紙）
聖母子像に黒死病終息祈願する信者

こそ最善策と謳われる（ヨハネス・ヤコービ（c.1315-84年）著『黒死病養生訓』1357年 [5-6葉立て四つ折り小冊子]；ポルトガル語版、1495-96年）。非感染者の逃亡は患者早期発見による隔離（感染者＝元来宗教的に穢れた者）の裏返しで、検疫（Quarantine:40日）もイエスの40日40夜荒野での断食後、弱体化してもなお悪魔（＝悪疫）の誘惑を退ける神業に由来する⁽⁴⁾。

一方、中世末期からユダヤ人に対する差別的な言動が認められる。その最たるものとして、疫病ではないが、地震という自然災害の一環で、露見したユダヤ人差別の報告を当時の宮廷劇作家は書簡で述べているので、ここに解説を加えて紹介してみたい。

中近世ポルトガル宮廷劇作家による書簡の解説：

タイトルは「1531年1月26日に発生した地震について、パルメラ（Palmela）⁽⁵⁾に今居を定められておられる主君・国王ジョアン三世にジル・ヴィセンテ（Gil Vicente：1465年?-1536年?）⁽⁶⁾がサンタレン（Santarém）⁽⁷⁾から宛てた書簡」である。

ジル・ヴィセンテはこの書簡の中で、新キリスト教徒＝キリスト教に改宗したユダヤ人を弁護している。キリスト教の伝統的な教理を把握し、実践的にそれを活用し、説得力ある《演説》に仕上げている。特にここではキー・ワードとして《悪の非在》を中心に論を進めてみよう。

ジル・ヴィセンテは神の完全性＝絶対性＝永遠性（第一の世界）を前提として、それがよりよく認識されるために、第二の世界、即ち此岸であるこの世の不完全性＝相対性＝非永遠性を指摘する。この考えは、例えば「第11巻に展開されている時間論[…]、時間こそ、被造物の存在にとっての形式であり、被造物

と創造主との区別は、とりもなおさず時間と永遠との区別であるからである」（聖アウグスティヌス（354-430年）著『告白』⁽⁸⁾）に通じ、彼が《演説》で《神への奉仕》というフレーズを繰り返して用いるその背後には、『告白』の根本思想である「神は絶対的に欲求のないもの、休息そのもの、永遠の平和であるのに対して、わたしたちは、無から創造されたかぎり、消滅的なもの、欠陥のあるもの、たえず欲求するものであり、しかもその欲求を神に向け、休息を神のうちに見出すものである。つまり、神における休息が被造物の目標であるということ」（同書引用：p.284）を読み取らねばならず、《悪の非在》概念がここに含意されている。

また、未発生地震第二波について修道士による予言に関して、当時の占星術は、ヴィセンテも語る通り、純然たる科学であり、未来のことを予知する者として占星術師は宮廷のお抱え身分で、例外的な厚遇を受け、法外な高給が支払われている。占星術師の多くはユダヤ人であり、宮廷の御用学としての占星術の伝統は少なくとも、17世紀まで続いている⁽⁹⁾。つまり、ジル・ヴィセンテはここでもユダヤ人弁護の一環として「占星術」をユダヤ人の隠語として比喩的に用い、またサンタレンの修道士たちの予言を否定することによってユダヤ人を肯定的に評価する格好をとり、やはりユダヤ人を弁護しようとしているのではないか。

宮廷劇作家ジル・ヴィセンテの《悪の非在》論：

さて、ジル・ヴィセンテが「我が国では宗教熱が余りに高揚しているばかりに偶然にも生じた事態であって、神は十分に奉仕を受けてそのことに満悦しておられる」と結論を出すとき、極めて現実には則した形で、よい意味

で言葉巧みに《悪の非在》を説いている。

それはどういうことか。中世キリスト教社会の中でユダヤ人はカトリック社会から宗教的に関与されることなく、また何ら束縛も受けることなく全く自由に、しかし文化の挑発的な部分として社会の周縁的な位置付けを与えられて生活していた⁽¹⁰⁾。ところが15世紀末になってカトリック陣営がユダヤ人のキリスト教への《強制》改宗に乗り出し⁽¹¹⁾、他方、ユダヤ人は自発的なキリスト教への改宗でない限り、再び本来のユダヤ教に復帰したところで罰せられることのない中世的な伝統的価値観を堅持して、たとえ、強制的に改宗されたとしても、ユダヤ教に復帰していた当時の状況があり、ジル・ヴィセンテは《強制》改宗を否定しながら、即ち強制改宗ユダヤ人（新キリスト教徒）がユダヤ教に再度復帰することは中世的なモラルから判断して決して「ポルトガルにおいて昨今行なわれている」と修道士たちが説く「大罪」ではないと言わんとしている。

この書簡から5年後、海外交易に要する巨額の費用のために生じた、フランドル・カスティリヤ金融市場での莫大な借款——1498年インド航路発見で始まる香辛料貿易の大型船舶は5～6割しか帰還せず、年率25%に上る高金利海上保険料が要因として——が経済的な圧迫を与え⁽¹²⁾、窮乏の危機に曝されている国家財政救済の切り札として、経済的社会的活動を行なう資本家ユダヤ人の財産没収を合法化する制度がポルトガルに導入される⁽¹³⁾。新キリスト教徒がユダヤ教に復帰した場合、極刑に処されることになった。すべての犠牲者が新キリスト教徒でないとしても、1821年全廃されるまで285年間、異端審問制度（Inquisição）が行った火刑式は760回に上り、犠牲者は約1,800人に達したと言われる⁽¹⁴⁾。ともかく制度がスタートすることによって中世的な価値観にそぐわない、ジル・ヴィセン

テの否定する《強制》概念は公の認められるところとなった。ここで言う《悪の非在》の《悪》とは勿論強制改宗ユダヤ人＝新キリスト教徒のユダヤ教復帰を指している。

ジル・ヴィセンテは1497年の国王マヌエル一世による強制改宗に異議を唱える形で、1506年アブランテス（Abrantes）⁽¹⁵⁾ 宮殿における説教で、《ユダヤ人に心からキリスト教徒であることを願っても無駄なことである》⁽¹⁶⁾ と説く。

新キリスト教徒＝強制改宗ユダヤ教徒をめぐるとの問題：

新キリスト教徒（cristãos-novos）とはgente de nação, conversos, marranosとも呼ばれ、ユダヤ教を捨てキリスト教に改宗した者の一般的呼称で、教会法はキリスト教改宗者から7代目までを新キリスト教徒として取り扱った⁽¹⁷⁾。今回の書簡に登場する新キリスト教徒は特に1497年1月に国王の独断的な命令で執行された在住ユダヤ人の強制改宗の末にキリスト教徒になったものを指す。当時2万人のユダヤ人のうち自らの生命を賭して強制改宗に抵抗したものは僅か7、8人に過ぎなかったのである⁽¹⁸⁾。

天災としての地震をユダヤ人のせいであると一般民衆に説いた修道士たち。ユダヤ人は襲撃されるのを恐れて、逃避行という自衛手段に訴える。彼らの脳裏には過去の様々な呪わしい記憶が、先祖から伝承された痛ましい事件が去来したであろう。

スペイン・ユダヤ人に入国許可が認められた時、国王ジョアン二世（在位：1481-95年）はユダヤ人から徴収する入国税をアフリカの戦費にあて、国民の負担をそれだけ軽減することを理由に、一人につき8クルザドスの入国税を支払うこと、ポルトガル滞在は8か月を限度とし、ポルトガルは彼らの望むと

ころに船で運搬輸送することを条件にスペイン・ユダヤ人の一時逗留を許可する決定を下した。然しながら、国王は約束を履行することなく、北アフリカ・ポルトガル領に彼らを運ぶ一方、一時滞在期限が切れても出国しないものを奴隷の身分に零落させ、2歳から10歳の未成年者を強制的に島流しにした（1493年）⁽¹⁹⁾。また次の国王マヌエル一世（在位：1495-1521年）は1497年2月、14歳以下のユダヤ人の子女を親元から引き離し、キリスト教の宗教的訓育を施す政策に打って出た⁽²⁰⁾。

あるいは、1503年食糧品の物価高騰はユダヤ人が利潤追及のために仕組んだ策略「買い占め」であるとの嫌疑がユダヤ人に向けられ、翌年5月リスボンで往時の商業中心地であった繁華街・新開地通りに住む新キリスト教徒たちが下層民・若者の侮辱行為に屈し、危害を加えられる暴動騒ぎが発生している。官憲は事件の主謀者を逮捕、笞刑の末に遠島流刑という厳しい処分を下している。この厳罰は一般民衆を心理的に逆撫でする結果となり、彼らの反ユダヤ感情を益々募らせることになった⁽²¹⁾。1505年4月古代ローマ神殿などが残る古代文明都市南部エヴォラでは新キリスト教徒が原因で諍いが生じ、そのさ中建設中のシナゴグ（ユダヤ教会堂）が倒壊されるという事件が起きている⁽²²⁾。この種の反ユダヤ感情の爆発した暴挙など同種の事例は枚挙に遑がない。

ペストをめぐる軋轢：

ところで、これら一連の事件の最悪のケースになるのが、ペスト終息祈願のための懺悔・告白の儀式の際、1506年4月19日首都リスボンで発生したユダヤ人大量虐殺・略奪事件である。事件の発端はサン・ドミンゴス修道院で十字架がただならぬ光を発し、会衆たちはそれは神の奇蹟であり、超自然現象であると

判断し、これで疫病は収まると確信し、宗教的興奮を漏らしたのである。

それに対し、一人の会衆がその判断を否定し、それは光の単純な物理的作用であり、一本の乾いた棒切れ「十字架」がどのようにして奇蹟を引き起こすはずがありませんかとカトリック信者にしてみれば神を冒瀆する言葉を発したのである。そして致命的なことにその神聖冒瀆の当人が新キリスト教徒であったのである。カトリックの会衆たちは突如彼の髪の毛を鷲掴み、修道院の前庭に引き摺り出し、殴殺するのに飽き足らず、隣接中央広場ロシオ（Rossio）まで死体を強引に運び、急拵えした焚き火に死体を投げ入れて焼いてしまった。一方、2人の修道士は神聖なる奇蹟をユダヤ人が冒瀆したと怒号を発し、激怒した口調で、キリスト教に対するユダヤ教徒のこの侮辱行為に復讐すべきであると群衆を扇動した。それから3日間殺戮と劫掠の生々しい地獄絵巻が繰り広げられることになる。新キリスト教徒にとっては、正に永遠に続くと思われた戦慄すべき72時間であったろう。一説には事件の犠牲者は1,900人とも、また一説には4,000人とも伝えられる。官憲の武力介入は迅速で、瞬時にして騒動は鎮圧され、約50名に上る者が騒ぎの主犯として罰せられた。2人の修道士は火刑に処せられ、残忍な行為の限りを尽くしたとされる女性のうち20名ないし30名は極刑に罰せられた。リスボン市に対しても幾つかなの特権が剥奪され、住民に対しては全財産の5分の1に相当する額の罰金が科せられることになった。サン・ドミンゴス修道院も一時閉鎖される⁽²³⁾。1497年強制改宗直後、同年5月新キリスト教徒の宗教上の行動については向こう20年間詮議立てしないことに決めた法令が発布され⁽²⁴⁾、その法令が有効であった期間内に勃発した混乱・大量虐殺だけに、ユダヤ人の驚きは並大抵のものではなかったと推察される。



リスボン古地図

左上「王冠国旗紋章」右下、数字57「聖ロック教会城壁扉」の左上が数字32「聖ロック教会」（楕円形枠）。そこから右斜め下方向に長方形空間：数字11「ロシオ広場」（楕円形枠）。右隅数字28「サン・ドミンゴス修道院」（楕円形枠）。各数字は下記説明枠に下線附（Georgius Branius, *Urbium praecipuarum mundi theatrum quintum*, Köln, 1593.）

法的平等を超えた集団ヒステリー（同調主義）：

いずれの記憶が去来したにせよ、書簡に現われる「新キリスト教徒は身を隠してしまい、民衆を死ぬほど恐れておりました」というフレーズは彼らの心象を的確に伝えるものであった。1517年に終了する1497年5月発布の上記の法令を1512年にさらに16年延長しているだけに⁽²⁵⁾、また1506年の血の惨劇直後、翌1507年新キリスト教徒に関する唯一の法律上の差別であった国外移動禁止令も廃止され、新キリスト教徒とカトリック教徒との区別は全くなり、同等の権利を享受し、義務を果たすことになっていただけに、今回

の地震の際に襲いかかってくるであろう——勿論幸いなことにジル・ヴィセンテの尽力によってかろうじて未然に防がれた——集団ヒステリー・血の殺戮にユダヤ人たちは逃避行先で身震いしていたに違いない。つまり、過去の生々しい記憶が同時代的な直接体験として現実に蘇ることに対する嫌悪感と危機感を切実な思いで受け止めていたはずである。

これは、対岸の火事ではなく、関東大震災（1923年）では、朝鮮人が襲撃してくる、井戸に毒を入れる等々の流言蜚語（デマゴギー）が流され、これに踊らされた軍隊・警察・自警団等によって、なんの理由もなく、六千人以上の朝鮮人が虐殺されたのである。勿論流

言輩語の発生源は官製であった⁽²⁶⁾。ユダヤ人虐待の場合より手の込んだ、権力筋がより一段高い所で権力集中のために政治的な血の鎮魂式を仕組んだと見ることは十分に可能であろう。

附記：神戸発「光村印刷」黎明期の出版事業：『兵庫縣ペスト流行誌』：

ところで、出身地の国際港神戸で、明治末期から大正期にかけて複数回にわたって外来船舶経由で黒死病が発生したことがあり、風評被害の予防策も含めて丹念な防疫対策が施され、その大部な報告書が残されており、つぶさに分析したことがある⁽²⁷⁾。

山口県光井村（現在光市）出身の廻船問屋「長門屋」光村弥兵衛の長男（庶子）・利藻の起業した「光村印刷」が請け負った『兵庫縣ペスト流行誌』（上下二巻本、兵庫縣警察部、1912）であるが、1995年以前旧大阪外国語大学勤務時代に兵庫縣庁から原本を取り寄せ、閲覧した。「光村印刷」は、戦後令名を馳せる教科書会社「光村図書」の前身で、起業黎明期の出版事業になる。小学校の国語などの教科書で、憶えておられる方も多いと思うが、この『流行誌』にもカラーイラスト・図版など目を引く整然とした「繋ぎ合せの美学」があり、感心した⁽²⁸⁾。

2007年大阪大学との統合後、豊中キャンパスに異動した際に手元に残るコピーを改めて繙いて『流行誌』奥付にある「光村印刷」住所を見て唾然とした。神戸の実家旧住所名であった。1914年、「中之島中央公会堂」の川を挟んだ南側、大阪支社「北浜写真館」——1972年取り壊された後、9階建ての松岡ビルとなり、現存。元々山口で隣港「室積浦」の廻船問屋「松岡」の親戚京大の整形外科医が日本初で開業するために、光村から譲り受けた——を、神戸本社同様に豊んで、再起を賭

けて上京するが、40年後、祖母が両親の婚姻に際して、その住所にあった当時の新築家屋を1955年頃に買い与えている。勿論、何の関係もないが、「偶然の出会いの玉手箱」を開けたような心境で、仰天した⁽²⁹⁾。

その後、最近になって、創立30周年『日本室素事業大観』（1938年）豪華本の存在を知り、奥付に「審美書院」の名前を見つけた。創業者・光村利藻は、世界最大・最多色の豪華木版画「孔雀明王像」をセントルイス万博（1904年）に出品・名誉金牌を受賞した後、「光村印刷株式会社」（1909年）設立を目途に、自社「審美書院」を1906年に株式会社化する。つまり、上記豪華本に利藻の関与がないか。2018年を通じて、現在の光村印刷と情報交換しながら、社史なども含む貴重な稀覯本の贈呈を受けながら、分析を進めた。その結果、「審美書院」はニッチツ創始者野口家に株式買収され、利藻の積年の印刷技術は継承され、その集大成がこの豪華本に結実したことが判明した。戦後所謂美術豪華本出版の礎が築かれたのである⁽³⁰⁾。

最後に：

今回のコロナ禍の所謂「異質な他者を排除する」差別的言動は、消去法で残った原初的で動物的な拒否反応に由来する「非科学的な」防疫と言わざるを得ない。そうした逸脱的、非規範的、非人道的な行為を一掃するために、一刻も早く、本来の科学的＝疫学的な根拠に基づく防疫措置が講ぜられることが望まれる。

巻末資料：

1531年1月26日に発生した地震について、パルメラ⁽⁵⁾に今居を定められておられる主君・国王ドン・ジョアン三世にジル・ヴィセンテ⁽⁶⁾がサンタレン⁽⁷⁾から宛てた書簡（全

訳)⁽³¹⁾：

主君国王陛下

先般発生致しました地震の件につきまして当地の修道士方々の説教、ならびにその行動は些かも私を満足させるものではございませんでした。その理由を申し上げますれば、彼らの所業が一般民衆を驚愕させてしまうのに十分であっただけではなく、更に一般民衆を震え上がらせる二つの事柄を断言致しましたからなのでございます。

まず彼らの申しました第一の事柄とは、ポルトガルにおいて昨今行われている大罪のために神の憤怒がかの事態を引き起こし、加えてそれが自然の運行によるものではないと言って即座に、地震発生の原因としてその大罪を指摘したことであります。これにつきましては修道士の方々が聖霊の恩寵の総和以上に無知の総和に満たされていると私、拝察致します。

彼らが民衆に与えた第二の恐怖とは、かの地震が起きました折に、今の地震よりは揺れの大きいものではないにせよ、既にまた別の地震が襲来する途上にあり、民衆の許には木曜日の午後一時にやって来るであろうと彼らが予測したことであります。一般民衆はその言葉を鵜呑みにし、すぐさま地震に備えるためにオリーブ樹の繁茂する一帯に逃れ、そこで地震到来を待ち構えたのです。

私の依頼に応じて、例の修道士の方々の御臨席を得て、この市のサン・フランシスコ修道院⁽³²⁾におきましてこの二つの命題に関連する演説を次のように致しました：

《尊師様御一同、かの至高にして世々を統べ治められる我が主は二つの世界を所有なさっておられます。即ち、第一の世界とは永久に始まり、永久へと続く世界であり、神の輝く栄光、永えの安息、穏やかなる平和、諍いなき静謐、溢れる極楽、この上なき和合の世界であります。これが第一の世界であります。

次に申し述べます第二の世界とは日々我々の暮らす世界であり、無量の神の叡智は、第一の世界に対立するものとして、この世界をお打ち建てになられました。換言致しますれば、全ては安息もなく、確かなる堅固さもなく、崩れることなき悦楽もなく、永遠の栄華もなく、まして全ては短く、全ては脆く、全ては偽りに満ち、恐ろしくも、また厭わしく、疲れ果て、不完全であるのでございます。これらの対立するものによって、第一の世界の栄光のあらゆる完全性が認識されんがために、第二の世界の存在価値はあると申せましょう。さらにその平和に満ち溢れた和合がよりよく感ぜられますようにと、この第二の世界で神の叡智が創造なされたあらゆる運動とその作用は相反するものなのです。神はこの地上界において一切のものが完全なる永続性を有することはないと望まれましたので、あるものは、他のあるものに終焉をもたらし、またあらゆる種類のものは、必ずその対立するものを有するという秩序をこの世界に確立なさいました。

具体的に申し上げますと、春の柔らかな美しさに対して夏の炎のような暑さ、人間の儂き虚栄に対して、死への期待、麗しき外観に対して悪疫に冒された呪われし肉体、若き生命力に対して老衰、さらに寵遇に対して羨望、富裕に対して貧窮、さらに、堅牢に聳え立つ樹木の鞏固さに対して荒れ狂う暴風雨、立派な教会修道院・豪華な建造物に対して各地で幾度となく数多い建築物、ならびに都市を破壊してきた地震であります。

これらは自然に由来する生成流転でありますから、聖母マリアが御出産なされた時、突如として崩壊してしまったローマの平和神殿がそうであるように、奇蹟として記録されたすべての事象とは異なって奇蹟として記録されなかつたのであります。またソドムの極めて人口の多い五つの町⁽³³⁾と紅海のエジプト

の滅亡⁽³⁴⁾、仔牛を崇拜する者たちの破滅⁽³⁵⁾、モーゼとアロンのことで不平を漏らす者たちの精神の頹廢⁽³⁶⁾、イェルサレムの破壊⁽³⁷⁾はこの第二の世界の秩序がこれらのことに何ら関与することなく、奇蹟であり、神の新たな裁可によりこの世界で生じたこととして記録されたのであります。

太陽の下では一切のものは嘗てそうであったものに回帰することなく存在することはあり得ず、今回の地震から生じたことは必ずや早晚そうならざるを得なかった訳でありますから、奇蹟として記録されなかったのです。

私が結論として申し上げたいのは我々を驚愕させた地震は神の憤怒ではなく、今回に関しては建造物の損害を引き起こす自然力の憤りという形で、むしろ主なる神の慈悲が下ったものだということです。敢えてこう申し述べるのが確かなことでないとするならば、私を火刑に処していただいても⁽³⁸⁾一向に構わぬ所存でございます。

第二の命題に回答する格好で、直後に別の地震が襲来し、2月25日には海上で津波が発生すると人々に告げた例の方々には批判の鋒先を向け、私はこう語りました：

《神は人間を創造されるや否や、地上のエデンの園に命令⁽³⁹⁾を下されました。熾天使であれ、天使であれ、大天使であれ、また男であれ、女であれ、さらに聖人であれ、聖女であれ、神の母御の腹部の神聖さであれ、来たるべき事柄に介入するほど大胆不敵であってはならないという旨の命令でありました。その後、モーゼの時代に神は再度命令⁽⁴⁰⁾を下されました。それは如何なる占い師も、まして魔術師も未来のことへの介入は相成らぬとの主旨でありました。神が人間に化肉した後、神は同じ事について使徒たちに告げて、もう一度命令を下されました：

《汝らが来たるべきことを知るには適當ではない。その理由はと申せば、それは主なる

神の全能に属することだからである》⁽⁴¹⁾

それ故に、学識のある方々がその種のことなどをおっしゃるとは露とも思わず、予言者ほどには嘘つきではあるまいと固く信じておりましたものですから、主の恐れ多い命令と禁令に刃を向けて豪胆な態度を顕わにしている御姿には恐れ入った次第でございます。

そしてまた一方、何人たりとも、永遠なる神の叡知の秘密におきまして以外は解き明かし得ない事柄を知り得ようはずもないこと、具体的に申し上げれば、地震が如何ようにして、まず何時、どの程度の規模で揺れるかについては何人たりとも知り得ようはずもないことを信仰の如く、信じ込んでしまっております一般民衆にも少なからず、私は恐れ入っているのでございます。

科学である占星術⁽⁴²⁾によって地震予知を行なうと申せば、それは可能なことございましょう。私は、ここで占星術を解することのできない現今の人々のことを申し上げているのではなく、この学がそれ自体、極めて深奥で、古代ギリシャの賢者・哲学者、モーゼ、モンテレジオのヨハネ⁽⁴³⁾すら真の判断力をもってしてもその学の一欠片も理解できなかったことを申し上げたいのです。魔術によって占えば、全く現実性を欠いてしまい、その全ての実質内容は事象の外観を見ているだけで、来たるべき事柄については一切分からないのであります。予言者の靈魂によれば、既に最後の予言者を十字架にかけてしまっています。つまり、そのような靈魂は最早存在するはずもないのです。

有徳なる修道士の方々よ、汝らが御改心なさって下さることを期待して私は結論を申し上げることに致します。そのようなことを公言なさるのは分別を欠くものであり、まして神への奉仕に適うものでは決してありません。その理由を申し述べますと、説教とは呪詛することであるはずはないのですから。

ポルトガル王国の町村ならびに都市において、とりわけリスボンにおいて、たとえ多くの罪が存在していると致しましても、数限りない慈善活動と巡礼、多くのミサと祈禱、参拝、断食、訓育、それに公的にせよ、私的にせよ、尽きることのない仁慈事業が行なわれております。

我々の宗教の中で今なおよそ者であっても受け入れられている者が、何人かいるとしても、次のように考えるべきではありませんまいか。つまり、我が国では宗教熱が余りに高揚しているばかりに偶然にも生じた事態であって、神は十分に奉仕を受けてそのことに満悦しておられるという具合にであります。民衆の奇異な考えを満足させるために、その者たちを虐げ、放逐するよりも、彼らを勇気づけ、告解（罪の告白を）させ、向上の道を歩ませる方が、神の従僕とその説教者にとって、正しく徳行と申せましょう》

誰しものが私を誉め讃え、全くもってよい点を指摘したと認めますので、私は国王陛下に書面にてそのことを御伝え致します。陛下の王国の津々浦々におきまして望まれておりますのと同程度の御安息と御喜悦を主なる神が陛下に御与えになられんことも付け加えさせていただきますとともに、演説の中では不足しておりますことを私の筆力によりまして、申し上げることを意図したためでもございます。然しながら、国王陛下は今回の私の行動が神への奉仕に適ったものであり、死期を間近に控えております私にとりまして、予々抱いておりました、神に奉仕したいとの願いがかくも望み通りに叶えられる機会が与えられるなどとは考えも及びませんでしたことが御分かりになりましょう。

その理由を申し述べさせていただきますと、第一の命題が発せられるや、新キリスト教徒（改宗ユダヤ人）は身を隠してしまい、民衆を死ぬほど恐れておりました。そこで、

私が以上の注意を与えましたところ、即座に、次の土曜日、全ての説教者たちは私の意向に従ったからでございます。

（ ）は林田が補足。

註

- (1) 「21世紀グローバリゼーション時代に改めて「健康」を問う」(『公衆衛生』医学書院、2020)、(84) p.492-493。
- (2) 天然痘：<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansenohanashi/445-smallpox-intro.html>
コレラ：<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansenohanashi/402-cholera-intro.html>
- (3) <http://www.med.akita-u.ac.jp/~doubutu/matsuda/kougi/JALASinOkayama/kougi/Jenner.html>
- (4) 防疫隔離措置のルーツはイタリア・ミラノ市条例（1374年1月17日付）：聖職者はペスト（黒死病）発生・患者発見の即応的・義務的な報告を怠ってはならない。これを遵守せぬ者には、全財産没収・火刑の厳罰が科される。ペスト患者は即刻、郊外放逐・療養、死後埋葬される措置をとること。因みに、ポルトガルでは、リスボン市郊外（城壁外）聖ロック教会（慈善院）がその役割を担った。また、インド航路発見の年、1498年王族庇護下で赤ちゃんポストが始まり、受け入れ先教会としても有名。参考文献：拙稿「天正遣欧使節と聖ロック教会」(『日本史研究』、1993)、(373) p.75-79。
- (5) 1166年イベリア半島国土回復運動後、サンティアゴ騎士団に譲渡。リスボン南東25kmに位置する。
- (6) 参考：Gil Vicente：
https://www.ebiografia.com/gil_vicente/
<https://www.todamateria.com.br/gil-vicente/>
- (7) 1147年ポルトガル国内国土回復運動完了。ポルトガル最古の都市の一つ。宮殿も

- 設置される。リスボン北東約75kmにあるテージョ川河岸都市。
- (8) 聖アウグスティヌス、服部英次郎訳『告白』(上)、岩波文庫、1976、p.287.
- (9) Joel Serrão, *Dicionário de História de Portugal*, Lisboa, 1971, vol. I, p.241-42, vol.III, p.4 ; F. de Almeida, *História de Igreja em Portugal*, Coimbra, 1910(2ª.ed.), vol.I, p.396,403;vol. II, p.366.
- (10) Frei Amador Arrais, *Diálogos*, Lisboa, 1944, p.26.
- (11) 1492年スペインの非改宗ユダヤ教徒追放を嚆矢とするユダヤ人に対する寛容政策のコペルニクスの転回と考える。
- (12) Vitorino Magalhães Godinho, *Finanças Públicas e Estrutura do Estado* (in Joel Serrão, *op.cit.*, F項) ; F.Luís de Sousa, *Anais de D.João III*, p.272-74.
- (13) António José Saraiva, *Inquisição e Cristãos-Novos*, Porto, 1969.
- (14) José Lourenço D.de Mendonça e António Joaquim Moreira, *História dos Principais Actos e Procedimentos da Inquisição em Portugal* (Colecção « Biblioteca de Autores Portugueses »), Lisboa, 1979.
- (15) リスボン北東約115kmにある都市。

- (16) Gil Vicente, *Hũa pregação feyta em Abrantes ao nacimiento do iffante dom Luis, in Obras Completas de Gil Vicente, Reimpressão « Fac-Similada » da Edição de 1562*, Lisboa, 1928, fol. CCLI-CCL III.



『ジル・ヴィセンテ全集本』1562年版(影印本)、ポルトガル国立図書館刊、1928年
火を噴く怪獣などが表紙を飾るのは中近世の常套手段で、本の中身が神聖で、これからページをめくり、読書するに際して、襟を正し、身を浄めよというサインである。丁度教会入口に座す獅子像と宗教文化的に同義である。ただ、日本の某百貨店の正面玄関に座す獅子像は別の意味である。

- (17) Alexandre Herculano, *História da Origem e do Estabelecimento da Inquisição em Portugal* (tomo I), Lisboa, 1854-55, p.76.
- (18) Damião Peres監修, *História de Portugal*, Barcelos, 1928-37, vol. III, p.228; A.N.Ribeiro Sanches, *Christãos Novos e Chrisãos Velhos em Portugal* (Colecção Mutações 9), Porto, 1973, p.34-35.
- (19) Damião Peres 監修, *op.cit.*, vol. III, p.208 ; J. Lúcio de Azevedo, *História dos Cristãos*

- Novos Portugueses*, Lisboa, 1975 (2^a.ed.), p.24.
- (20) J. Lúcio de Azevedo, *op.cit.*, p.24.
- (21) *ibid.*, p.59.
- (22) *ibid.*, p.59.
- (23) *ibid.*, p.59-60 ; 参考 : 現サンドミンゴス教会前広場ストリートビュー : <https://www.lisboa360.pt/>
- (24) *ibid.*, p.57; Damião Peres 監修, *op.cit.*, vol. III, p.222.
- (25) Damião Peres 監修, *op.cit.*, vol. III, p.222.
- (26) 山崎今朝弥著・森長英三郎編『地震・憲兵・火事・巡査』、岩波文庫、1982、p.217-18.
- (27) 活動情報: 聖ロクス (胸元刻印紅色十字架) 崇敬、CSCD、2008.3.19 : <http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/mashayas/activity/view/175.html>
- (28) 大阪大学外国語学部同窓会 : 咲耶会 : 2007年統合後キャンパス引っ越しの折の発見 (1) : <https://sakuyakai.net/2397/>
国立国会図書館デジタルコレクション版『兵庫縣ベスト流行誌』(上下二巻本、兵庫県 警察部、1912) 白黒写真保存 : <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835389>
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835390>
- (29) 同上 : 2007年統合後キャンパス引っ越しの折の発見 (2) :
研究ノート : 「明治期神戸発光村美術出版系譜学」 : <https://sakuyakai.net/2406/>
北浜写真館は下記URLから「大阪市パノラマ地図」(1924年) が拡大閲覧でき、北濱三に確認できる。因みに、上本町八には創立3年目の外国語学校(旧大阪外大)も見える : <https://stroly.com/viewer/20101015001/>
<https://sakuyakai.net/766/>
<https://sakuyakai.net/1926/>
参考関連 : 現光村印刷所沿革 : <https://www.mitsumura.co.jp/about/history/>
孔雀明王像 : <https://www.takezasa.co.jp/news/n0228.html>
- 光村利藻 : https://www.jfpi.or.jp/files/user/pdf/printpia/pdf_part3_01/part3_01_032.pdf
<https://kotobank.jp/word/%E5%85%89%E6%9D%91%20%E5%88%A9%E8%97%BB-1655958>
光市室積の町並み : <http://matinami.o.oo7.jp/tyugoku2/hikari-murozumi.html>
光村推古書院 : <http://www.mitsumura-suiko.co.jp/company/>
- (30) 同上 : 2007年統合後キャンパス引っ越しの折の発見 (3) : その発見を契機とする研究ノート「考察 : 審美書院」 : <https://sakuyakai.net/2410/>
- (31) 底本 : Gil Vicente, *Carta q o autor escreueo a elRey sobre o tremor da terra. in Obras Completas de Gil Vicente, Reimpressão* 《*Fac-Similada*》 da Edição de 1562, Lisboa, 1928, fol. CCL VII -CCL VIII. ; Maria Leonor Carvalhão Buescu (1932-1999), *Copilaçam de totalas obras de Gil Vicente* (Colecção 《*Biblioteca de Autores Portugueses*》, 2 vols.), Lisboa, 1983.
- この後者の刊本について一言述べておくと、大航海時代によって短期間の内に蓄積された莫大な富に潤うポルトガル宮廷を背景にして生前縦横無尽に活躍し、当時宮廷劇作家として他のヨーロッパ諸国で肩を並べる者がなかったと評されるGil Vicente (1465 ? -1536 ?) の死後、息子Luís Vicenteが父親の遺した小冊子体裁の(上演用) テキストに改竄する形で編纂した*Copilaçam de totalas obras de Gil Vicente*, Lisboa, 1562. は必ずしもその名の示す通りに全集本ではないが、1562年版を文献学的に厳密を期し、基準を設けて現代式綴字法にtranscriptionしたものがこの2巻本である。
- 参考 : Biblioteca Virtual Miguel Cervantes :

Gil Vicente:

<http://www.cervantesvirtual.com/obras/autor/vicente-gil-1465-1537-513>

(32) 1242年国王サンショ二世 (Sancho II : 1223-48) 治世下に建立された。

参考:「中世ビスカヤ領主アロー族家系伝説と十三世紀ポルトガルの王位継承権問題」(『説話・伝承学』説話伝承学会、1995)、(3) p.77-93。

(33) ヨルダン低地の5つの町の一つで、ゴモラ、アデマ、ゼポイム、ゾアルなどととも記されている(「創世記」14:2-10)。ロトはアブラハムに別れ、肥沃なこの土地に住んだ(「創世記」13:11-13; 18:20)。ケダラオメル王など東方の5人に攻撃されたが、アブラハムはこれに反撃した(「創世記」14:17)。この町の住民は罪悪の故に、アブラハムの取り成しにもかかわらず、神により天からの硫黄と火をもって滅ぼされた(「創世記」19:1-28)。

(34) 「出エジプト記」15:21

(35) 仔牛礼拝はヤラベアム王の時代に著しく(「列王紀上」11:40、12:29)このような偶像崇拜は常に厳しく戒められた(「ホセア書」8:5; 10:5、「アモス書」5:5、「列王妃下」10:29、「詩篇」106:19)

(36) 「民数記」11:4以下、「詩篇」106。

(37) 前587-86ネブカデネザル2世による破壊(「エレミヤ書」38-39)

(38) 火刑とは異端刑であり、ジル・ヴィセンテは身の危険を顧みずに強弁しているのである。参考:「ラブレールは、その作品中でたびたび「[...]」であることを断言する、たとえ火刑にあってもとは申さぬが」(jusques au feu exclusive)というような奇妙な語句を使っています」(渡辺一夫『ヒューマニズム考』、講談社、1973、p.95)。「火刑は中世においては宗教上の犯罪者に科された。このばあい聖書の「畑は世界な

り。良き種は天国の子どもなり。毒麦は悪しき者の子どもなり。之を播きし仇は悪魔なり。収穫は世の終りなり。刈る者は御使たちなり。されば毒麦の集められて火に焚かる如く、世の終りにも欺くあるべし」(マタイ13:38-40)といった言葉が影響していたと考えられている。しかし火刑には火のみならず霊と灰を流す水も不可欠のものであった限りで呪術的な伝統が色こくのこっていた」(阿部謹也『刑更の社会史中世ヨーロッパ庶民生活』、中央公論、1978、p.86)

(39) 「創世記」3:2-3.

(40) 「出エジプト記」19-24.

(41) 「ヨハネ伝」16:12-15;「I コリント」2:13:9.

(42) 占星術 = 天文学は純粋科学であった。参考:註(9)

(43) Königsberg (ケーニヒスベルク) の占星術師。

林田雅至研究業績等一覽

著書・共著:

1. 『医療通訳4.0』連利博・吉富志津代監修、松柏社、2020年4月10日、162ページ。
2. 図録『ポルトガル装飾絵タイルアズレージョの芸術』日本語訳特別版(第9刷)、ポルトガル・カモンイス研究機構、ポルトガル国立アズレージョ博物館、2020年3月31日、84ページ。(この刊本[非売品]につき、希望者は下記メール:ishibashi.academy@gmail.comまでご連絡の上、着払い郵送可)
3. 『国際・未来医療学 健康・医療イノベーション』中田研・山崎慶太編集、大阪大学出版会、2017年9月15日、458ページ。分担:「医療通訳士とは何か?いかに養成していくか?」291-299ページ。
4. *A Língua Portuguesa no Mundo Passado*,

- Presente e Futuro* (『過去・現在・未来世界のポルトガル語』)、故João Malaca Casteleiro (ジョアン・マラカ・カステレイロ)監修、Edições Colibri(コリブリ出版)、2017年1月1日、397ページ。
- 分担：
- A PRESENÇA DA LÍNGUA E CULTURA PORTUGUESAS NO JAPÃO ATUAL E NA MINHA CARREIRA UNIVERSITÁRIA*, p.303-311. (現代日本と小生の大学人キャリアにおけるポルトガル語・文化の存在意義)、303~311ページ。
5. 『プログレッシブポルトガル語辞典』林田雅至、市之瀬敦、トイダ・エレナ、吉野朋子編(監修)、小学館、2015年11月12日、1154ページ。
 6. 『指して伝える！外国語診療ブッカー問診から生活指導まで症状別に対応』守山敏樹・林田雅至監修、南江堂、2014年5月、432ページ。
 7. 『ヨーロッパ・ことばと文化』野村泰幸編、大阪大学出版会、2013年10月、228ページ。
分担：「第6章 装飾絵タイル・アズレージョの世界 — 変容するポルトガル表象文化」116-133ページ。
 8. 『日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！Ⅱ』2011年度CSCD社学連携事業、大阪市・大阪大学包括協定実績、大阪大学コミュニケーション・デザインセンター、2012年3月31日、85ページ。
 9. 『ポルトガルを知るための55章』(第二版)明石書店、2011年10月15日、280ページ。
分担：「祝祭」189-193ページ；コラム「アズレージョに表れた天正遣欧少年使節」44-45ページ；コラム「イベリア半島言語事情「今昔物語」」130-131ページ。
 10. 『日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！』2010年度CSCD社学連携事業、大阪市・大阪大学包括協定実績、大阪大学コミュニケーション・デザインセンター、2011年3月31日、91ページ。分担：「はじめに豊中キャンパスにおける「洪庵塾」構想ありき」2-6；「大阪府観光戦略(素案)への提言」7-13ページ。
 11. 『ブラジル——旅があなたの情熱なら、ブラジルはあなたの恋人——』日本語版特別監修、ブラジル政府観光局、2010年7月1日、50ページ。
 12. 『外国籍住民の日本語・日本文化学習支援プログラム』2009年度CSCD社学連携事業、大阪市・大阪大学包括協定実績、大阪大学コミュニケーション・デザインセンター、2010年3月31日、139ページ。
分担：「雇用悪化の中で変容を迫られる日本語・日本文化学習プログラム」4-15ページ。
 13. 『説話・伝承学の脱領域』(説話・伝承学会創立25周年記念論集)、岩田書院、2008年4月1日、529ページ。分担：「視覚芸術の虜となる人々」477-486ページ。
 14. 『外国人サポーターハンドブック』(英語・中国語・タイ語・フィリピン語・スペイン語・ポルトガル語)、国立大学法人大阪大学、大阪府、OFIX(大阪府国際交流財団)、2008年1月、256ページ。
 15. 世界遺産登録記念・図録『輝きふたたび石見銀山展』山陰中央新報社、2007年7月14日、252ページ。執筆分担：「C. 大航海時代—ヨーロッパに姿を現した荘厳な銀空間—」(展示品解説翻訳)73-85ページ；レオノール・ドルレー著「ポルトガル国立古美術館と金銀細工・貴金属宝石類コレクション」(翻訳)215-219ページ。
参考：http://www.shimakyu.co.jp/kagaya_kifutatabiiwamiginzanten.html
 16. 『外国人のための健康相談マニュアル』大阪府薬務課(作成委員会：伊藤みどり、乾英夫、庵原典子、笠原伸元、齋田幸

- 次, ジェシカ・ホーグ, 秦秀美, 林田雅至, 山口邦男)、2007年3月、163ページ。参考：http://www.pref.osaka.lg.jp/yakumu/yakkyokutorikumi/f_manual.html
<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/31410/00269527/manual8.pdf>
17. 『教育機関におけるボランティア活動の可能性 (IX) —2004年4月18日医療通訳国際シンポジウム・講演会開催記念号—』(ボランティア教育叢書 第9号) [2003年度 教育研究学内特別経費プロジェクト報告書]、大阪外国語大学、2004年3月31日、100ページ。
 18. 『教育機関におけるボランティア活動の可能性 (VIII) —2002年度開設地域連携事業推進室の多文化・多言語社会への挑戦記録—』(ボランティア教育叢書 第8号) [2002年度 教育研究学内特別経費プロジェクト報告書]、大阪外国語大学、2003年3月31日、87ページ。
 19. 『教育機関におけるボランティア活動の可能性 (VII) —授業を媒介にした語学ボランティア、実習の軌跡をたどる—』(ボランティア教育叢書 第7号) [2001年度 教育研究学内特別経費プロジェクト報告書]、大阪外国語大学、2002年3月30日、84ページ。
 20. 『教育機関におけるボランティア活動の可能性 (VI) —語学ボランティアを通じて多民族・多文化と「共に生きること」を模索する果てしなき旅のドキュメンター—』(ボランティア教育叢書 第6号) [2000年度 教育研究学内特別経費プロジェクト報告書]、大阪外国語大学、2001年3月31日、95ページ。
 21. 『スペイン・ポルトガルを知る事典』(新訂増補) 平凡社、2001年10月、544ページ。執筆分担：「祝祭」(p.150-152)、「ポルトガル映画」(p.319-21)、[増補項目]「ポルトガル美術」(p.468-70)「美術館」)、「ポルトガル映画」(p.467-68)、「オリベイラ」(p.439)、「ブランコ」(p.439)、「家族」(p.442)、「女性」(p.453)、「オディアナ第7の書」裏表紙解説。
 22. 『世界伝承文化研究 (I)』(1999年度教育研究学内特別経費プロジェクト報告書) 大阪外国語大学比較庶民文化研究会編、2000年3月31日、85ページ。
分担：「聖人伝説伝播の原動力—聖セバスティアヌスの場合—」63-85ページ。
 23. 『教育機関におけるボランティア活動の可能性 (V) —語学ボランティアの実践者たちはかく語りき—』(ボランティア教育叢書 第5号) [1999年度教育研究学内特別経費プロジェクト報告書]、大阪外国語大学、2000年3月31日、90ページ。
 24. インド航路発見500周年記念・日本ポルトガル文化交流特別展・図録『ポルトガル—栄光の500年展』東京富士美術館、1999年5月29日、231ページ。
参考：https://www.fujibi.or.jp/exhibitions/profile-of-exhibitions/?exhibit_id=1199910171
 25. 『教育機関におけるボランティア活動の可能性 (IV) —語学ボランティアによるさまざまなフィールド・ワークが切り拓く大いなる可能性を論ず—』[1998年度教育研究学内特別経費プロジェクト報告書]、大阪外国語大学、1999年3月31日、110ページ。
参考 (神戸大学震災文庫所収)：
<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/das/jsp/ja/DetailView.jsp?LANG=JA&METAID=00181547>
 26. 『メディア・リテラシー研究』(プロトタイプ) 大阪外国語大学 メディア・リテラシー研究会監修、1998年3月31日、68ページ。
 27. 『教育機関におけるボランティア活動の

- 可能性 (III) —ボランティア精神を底支える存在=生活実感力の上位概念公共的精神— (ボランティア教育叢書 第3号)、[1997年度教育研究学内特別経費プロジェクト報告書]、大阪外国語大学、1998年3月31日、88ページ。
28. 『教育機関におけるボランティア活動の可能性 (II) —生活実感力という新しい視点からボランティア活動を考える— (ボランティア教育叢書 第2号)、[1996年度教育研究学内特別経費プロジェクト報告書]、大阪外国語大学、1997年3月31日、85ページ。
29. 『教育機関におけるボランティア活動の可能性—大阪外国語大学が阪神大震災から学んだもの— (ボランティア教育叢書 創刊号) [1995年度教育研究学内特別経費プロジェクト報告書] 大阪外国語大学、1996年3月29日、125ページ。
30. *Portuguese Voyages to Asia and Japan in the Renaissance Period* (『ルネサンス期アジアと日本を結ぶポルトガル大航海時代』)、上智大学ルネサンス研究所、1994年、385ページ。
 分担: *The Spiritual Background of Portuguese Overseas Expansion in the Sixteenth Century: Iconology and Politics - the cults of St. Rock and St. Sebastian* (『ポルトガル海外進出のための精神的基盤: 図像学と政治学—聖ロックと聖セバスティアヌスの聖人崇拜—』)、372-385ページ。
31. 『吉澤典男教授追悼論文集』三省堂、1989年10月、465ページ。
 分担: 「pai (パパ) の文献学」281-290ページ。
32. 『入門やさしいポルトガル語』南雲堂、1987年6月15日 (第5刷: 1997年7月15日)、290ページ。

論文:

1. 「21世紀グローバル化時代に改めて「健康」を問う」(『公衆衛生』医学書院)、(84) 492-493ページ、2020年8月。
2. 「外国人ヘルスケアにおける外国語双方向性運用能力の不可欠性」(『医療通訳4.0』松柏社)、108-120ページ、2020年4月。
3. 「浅川伯教著「鈴木先生」(『京城日報』掲載、1930年5月)による鈴木先生の審美眼の分析考」(『Co*Design』大阪大学COデザインセンター)、(5) 65-75ページ、2019年3月31日。
4. 「外国語学習における媒介語の重要性」(『国際語としてのロシア語—国際統一基準に言語能力レベル評価システム構築の現状と将来的課題—』、大阪大学言語文化研究科)、1(1)、61-71ページ、2019年3月。
5. 「グローバルの観点から長期滞在外国人の生命を問う」(『大阪公衆衛生』公益財団法人・大阪公衆衛生協会)、(90) 17-19ページ、2019年3月。
6. 「グローバル外国語教育に不可欠な「高度汎用力」の原点: interactive competenceを支える「スクライビング」実践報告」林田雅至・印南敬介共著、(『Co*Design』大阪大学COデザインセンター)、3(1) 79-85ページ、2018年3月30日。
7. 「序論: Interactive competenceの観点から『日葡辞書』(1603-1604)の現代語化を考える」(『Co*Design』大阪大学COデザインセンター)、2(2) 59-69ページ、2017年9月15日。
8. 「医療通訳 (医療言語学によるイノベーション) はグローバル社会との「共創」によって世界の扉を開く」(『Co*Design』大阪大学COデザインセンター)、1(1) 85-102ページ、2017年3月31日。
9. *A história e a presença da língua e da cultura portuguesa no Japão*、記念学術講演 (日本

- におけるポルトガル語・文化の歴史と現在)、1916-2016 東京外国語大学ポルトガル語教育100周年記念イベント－Mundus Latinus in Japan－、2016年10月1日。
10. 「巡礼考—映像作品を通じたサンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼の現在性—」(『説話・伝承学』説話伝承学会)、(24) 19-30ページ、2016年4月25日。
 11. 「目指せ！多言語コミュニケーション・デザイナー」(『Communication-Design特別号』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター (CSCD))、(1) 108-117ページ、2016年3月31日。
 12. 「大学の取り組み—まずはUniversity Community Interpreterの養成を目指そう！—」(『多文化共生時代の法と言語』、科学研究費補助金・基盤研究A (平成22～25年度))、(1) 95-104ページ、2014年3月。
 13. 「Language Barrier Freeとアンドロイド仕様多言語問診票の可能性」(『社会医学研究』(特別号) 社会医学会)、149-150ページ、2012年7月15日。
 14. 「マイノリティ・コミュニティを考察する」(医療分野ポルトガル語スペイン語講座『平成23年度報告書』愛知県立大学)、27-35ページ、2011年11月。
 15. 「序論：日本社会の外国人疎外感を緩和・阻止せよ！」(『Communication-Design』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター (CSCD))、(5) 21-30ページ、2011年9月。
 16. 「旧大阪外国語大学・地域連携事業から新大阪大学・社会連携事業へ」(『Communication-Design』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター (CSCD))、(3) 226-236ページ、2010年3月。
 17. 「大航海時代のポルトガル・ルネサンス」(世界遺産登録記念・図録『輝きふたたび石見銀山展』山陰中央新報社)、89-90ページ、2007年7月14日。
 18. 「中世ポルトガルの歌謡について」(『テクストとしてのフランス文化』、1996-7年度特定研究報告書、大阪外国語大学フランス研究会)、77-94ページ、1998年3月16日。
 19. 「外国語教育の一環としてメディア・リテラシーを高める実践メディア教育」(『第37回全国研究大会発表論文集』、語学ラボラトリー学会 (LLA))、(37) 156-159ページ、1997年。
 20. 「マルチメディア時代の説話・伝承学」(『説話・伝承学』説話伝承学会)、(5) 25-30ページ、1997年4月25日。
 21. 「中世ビスカヤ領主アロー族家系伝説と十三世紀ポルトガルの王位継承権問題」(『説話・伝承学』説話伝承学会)、(3) 77-93ページ、1995年4月25日。
 22. 「私説《視覚映像文化論》その11：テレビドラマ化された筒井康隆『時をかける少女』(1976,角川文庫3637)～視覚率獲得のための図像創造過程の一例～」(『視聴覚外国語教育研究』大阪外国語大学)、(18) 31-45ページ、1995年3月。
 23. 「私説《視覚映像文化論》その10：図像解釈学による黒死病除け聖人崇拜分析～視覚的大衆操作技術の歴史学～」(『視聴覚外国語教育研究』大阪外国語大学)、(17) 13-28ページ、1994年3月。
 24. 「天正遣欧使節と聖ロック教会」(『日本史研究』)、(373) 75-79ページ、1993年9月。
 25. 「私説《視覚映像文化論》その9：紅色小十字架刻印・聖人物語」(『視聴覚外国語教育研究』大阪外国語大学)、(16) 39-55ページ、1993年3月。
 26. 「私説《視覚映像文化論》その8：秀逸なる芸術性溢れる空想的科学主義映画『ターミネーター2』」(視聴覚資料係編集『AV JOURNAL』大阪外国語大学)、(23) 6-8ページ、1992年3月。

27. 「私説《視覚映像文化論》その5：連続
幼女殺害事件・考」(『視聴覚外国語教育研
究』大阪外国語大学)、(13) 69-83ページ、
1990年3月。
28. 「mãe (母) の文献学」(『大阪外国語大
学論集』大阪外国語大学)、(1) 145-152ペー
ジ、1990年。
29. 「民衆文芸の系譜学」(『大阪外国語大学
学報』大阪外国語大学)、(77) 53-71ページ、
1989年。
30. 「大阪外国語大学における《語学教育》
のありかたについて」(『大阪外国語大学ポ
ルトガル・ブラジル語学科創立10周年記念
論文集』大阪外国語大学)、61-72ページ、
1989年。
31. 「ポルトガル語教材考 (2)」(『大阪外国
語大学学報 (言語・文学編)』大阪外国語
大学)、(75) 137-154ページ、1988年。
32. 「私説『視覚映像文化論』(その1 ポル
トガル映画・テレビ事情)」(視聴覚資料係
編集『AV JOURNAL』大阪外国語大学)、
(11) 12-14ページ、1987年。
33. 「ポルトガル語教材考 (1)」(『世界口承
文芸研究』大阪外国語大学口承文芸研究会
編、大阪大学)、(8) 467-478ページ、1987年。
34. 「異端審問制度と宮廷劇作家Gil Vicente」
(『大阪外国語大学学報 (言語編・文学
編)』大阪外国語大学)、(74) 87-96ページ、
1987年。
35. 「ペストと聖セバスティアヌス崇拜」(『大
阪外国語大学学報』大阪外国語大学)、(73)
81-99ページ、1986年。
36. 「ポルトガルのペスト養生訓」(『大阪外
国語大学学報』大阪外国語大学)、72 (2)
27-39ページ、1986年。
37. *A Inquisição : Gil Vicente A propósito do
conceito de conversão "à força"* (異端審問制
度：強制改宗の概念の視点による中近世劇
作家ジルヴィセンテ) (『Anais (日本ポル
トガルブラジル学会誌)』、日本ポルトガル
ブラジル学会)、(18) 69-77ページ、1984年。
38. 「映画『しろばんば』：(1962、日活、モ
ノクロ、滝沢英輔監督；1982年11月1日、
関西朝日系放送分)：修士論文序章一修士
論文のマーヅナル・ノートより」(『言語文
化研究』東京外国語大学院外国語学研究科
言語・文化研究会、東京外国語大学)、(1)
1-8ページ、1983年4月1日。
40. <<Tuina>>, *cerimónia japonesa e o culto de
S. Sebastião* (日本の儀式・追儺と聖セバス
ティアヌス崇拜) (『Revista Lusitana (ポ
ルトガル民俗学誌)』、Lisboa)、(4) 149-
169ページ、1982-83年。
- 上記註釈及び業績目録に含まれるすべての
URLの最終閲覧日付は2021年2月19日であ
ることをここに附言する。



リスボン旧市街地青空市場風景 (2016年3月25日：林田撮影)

私 の 健 康 法



国際シンポジウムで講演する筆者

30数年前、初めて海外で暮らしたのがインドネシア共和国の北スマトラ州メダンであった。村の保健所の医師や看護師との会話はほとんどインドネシア語だけ。インドネシア語は、もともと船乗りが使っていたマレー語を、独立時に国語と制定したものである。過去形も未来形もなく、複数形もない。非常にシンプルな言語として知られる。

インドネシア語の「jalan (ジャラン)」は「道」という意味。「ジャラン・ジャラン」と重ねていえば、道と道を勝手に歩き回るというイメージで「散歩する」という意味になる。私自身は、インドネシアの村をジャラン・ジャランと歩き回りながら、予防医学の大切さを学んだ。自分の専門の母子保健だけでなく、下痢予防のために井戸を掘る水供給対策、マラリア媒介蚊の発生源の生態調査などの重要性を幅広く教えてもらった。

— 府 政 だ よ り —

大阪府健康医療部では、保健衛生関連で、次の主な行事が行われる予定です。

- 禁煙週間 (5月31日世界禁煙デー)
5月31日～6月6日
- 水道週間
6月1日～7日
- ゴキブリ駆除強調月間
6月1日～30日
- 歯と口の健康週間
6月4日～10日
- 「ダメ。ゼッタイ。」普及運動
6月20日～7月19日
(6月26日国際麻薬乱用撲滅デー)

公益社団法人 日本WHO協会 理事長
甲南女子大学看護リハビリテーション学部
教授 中村 安秀

以後、毎年数回はアジアやアフリカのフィールドに出かけていた。海外では、日本と生活様式を変えざるを得ない。村で簡単に入手できる安全な飲み物は、コーラかビール。十分に火が通った食事は安心して食べられるが、油と砂糖がふんだんに使われている。大阪大学大学院人間科学研究科を定年退職する時期には、体重は10kgくらい増加していた。

一念発起して、運動量を増やすことで体重をコントロールすることにした。ちょうど、新型コロナウイルス感染症により海外出張ができなくなり、この35年間で初めて、1年間海外に行かず日本国内だけで過ごすことになった。歩数計を持ち歩き、三密を避けて、家の周りをジャラン・ジャランと散歩する日々。海外出張がないので、食生活も安定した。気がつけば、体重は数kg減少し、血液検査も正常化した。

地道に毎日続ける歩行運動やスクワットの成果は素晴らしい。しかし、そのうち、コロナ感染が落ち着き、インドネシアの街をジャラン・ジャランする日が来ることを心待ちにしている。

編 集 後 記

☆「*MaKoto*」第194号をお届けします。

今回の特集は、「防疫に関わる人文学的アプローチ」～2020年度退職記念の一環として～です。

原稿をご執筆いただきました、大阪大学COデザインセンター教授 林田 雅至 様並びに公益社団法人 日本WHO協会理事長、甲南女子大学看護リハビリテーション学部教授 中村 安秀 様の両先生には厚くお礼を申し上げます。

☆表紙の写真は、「シャーレーポピー」
(和泉市にて)

撮影者 阪南出張所 下出 英明